

2020年11月1日
諸聖徒日
東京聖三一教会

シラ 44:1-10、13-14
黙示録 7:2-4、9-17
マタイ 5:1-12

喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。

「隴を得て蜀を望む」という言葉があります。四字熟語としては「得隴望蜀」と言います。昔、中国の漢の光武帝が望みを叶えて、「隴西」というところを手に入れましたが、次は蜀という国を望んだという故事から出た諺として、一つのものに満足せず、それ以上のことを求め望むことを意味します。

この諺を冒頭で紹介するのは、私が最近これと似たような気持ちになったからです。コロナのせいで会衆参加の礼拝ができない時は、何とかしても会衆参加の礼拝だけでも毎主日行うことができればという思いが切実でした。けれども、礼拝が少し安定的に行えるようになると、今度は聖歌とチャントが歌えればという気持ちになったのです。皆さんも共感してくださると思います。最近、他の教区の教会の礼拝に参加されたある方は、「あの教会ではまるで何もなかったかのように礼拝をやっていた」とおっしゃいました。また、ある信徒の方は私に「教会で他の活動をしていても良いのではないか」と尋ねたりもしました。もちろん私も一日も早くもどのような教会に戻ってほしいです。けれども油断は禁物です。東京は他の都市より感染のリスクが高いので、専門家が安全であると言うまでは注意した方が良くと思います。

ところで、多くの学者たちは、コロナが終息しても、私たちの生活がコロナ前の状態に戻ることはできないと言っています。とても残念です。そして何か不安でもあります。けれども、この不便で不安定な時間が、もしかしたら信仰的な成長と成熟のための良い機会になるかもしれません。先日、ある信徒の方から、「今こそ、お祈りし放題、聖書の読み放題の時期である」という話を伺いました。外に出ることさえ自由にならない中ですが、代わりに個人的な時間が多くなり、思う存分お祈りすることができるし、思う存分聖書を読むことができるというのでした。共感できるお話でした。不安定なこの頃がむしろ信仰の本質について深く考えることができる時間となります。ですから私も最近C・S・ルイスが書いた「キリスト教の精髓」(Mere Christianity)という本を再び読んでみました。そして信仰の根本について再び考えてみました。それで皆さんにお勧めいたします。今のような時こそ、お祈りと聖書を通して信仰の根幹について改めて考えてみてください。きっと信仰的な成長と成熟のきっかけになるでしょう。

今日、私たちはご一緒にイエス様の「山上の説教」の初めのところを読みました。ところで、この福音もキリスト教の信仰の精髓を示す内容です。ある人は今日の福音を、「神の国のマグナ・カルタ」、また「神の国の大憲章」とも呼んでいました。それゆえ、より深く読んでみる必要があります。

さて、今日の福音の内容は、社会通念とは全く異なります。社会通念から見れば、財物は正直に儲ければ、多いほど良いです。社会的地位も高ければ高いほど良いです。世の中の人々は、他人に愛された分だけその人を愛し、また敵を憎みます。罪を犯した人は必ず罰を受けなければなりません。成功は褒められるべきことであるし、失敗は恥ずかしいことです。勝利は誇らしいことであり、敗北は恥ずかしいことです。このような社会通念は人々が社会でどのような身の振り方をすれば成功できるかを教えてくれます。

けれどもイエス様は、「貧しい人」、「悲しむ人」、「飢え渴く人」、「迫害される人」が幸いな人々であると宣べ伝えました。社会通念を持って考えてみれば、「貧しい人」、「悲しむ人」、「飢え渴く人」、「迫害される人」を幸いな人たちとは言いにくいです。いや、むしろ不幸な人々です。それにもかかわらずイエス様は彼らこそ幸いな人々であるとおっしゃいました。イエス様はなぜこのようにおっしゃったのでしょうか。貧しさ、悲しみ、迫害のような不幸はこの世での少しの間のことだから、このようにおっしゃったのでしょうか。そうかもしれません。けれども、もっと大事なことがあります。それは、信仰者は、身はこの世に属していますからこの世の人のように生きていかなければなりません、しかしこの世の人とは異なる人生を生きるべきでもあるのです。それで使徒書には信仰者たちを「聖なる者たち」と呼んでいます。

ことに今日は諸聖徒日です。諸聖徒日というと、多くの聖人を記念する日である、と思う方がいらっしゃるかもしれません。もちろん昔はそういう記念日でもありました。けれども諸聖徒日の聖徒とは、先に申した「聖なる者たち」つまり、イエス・キリストを信じるすべての人という意味です。したがって、諸聖徒日は「聖なる者たち」としてこの世を生きてきた信仰者たちを記念する日なのです。

私は、かなり前から「なぜあえて、諸聖徒日を通して多くの信仰者たちを記念するのか」という疑問を持っていました。私たちは、神様のみ言葉に従いながら生きていこうと誓いました。教会ではその模範として聖人の人生を教えてください。けれども、聖人のような人生を生きていく自信はありません。そのため時々このように自ら質問します。このような姿で神様のみ前に立つことができるか、このような姿で天国に入ることができるか？

私は、諸聖徒日を記念することには、このように悩みながら生きている私たちのための特別な理由があると思います。それは、今日私たちが記念する多くの聖徒たちも、私たちと似ている人生を生きていたからです。聖徒たちも、ある時は勇気が足りなくて先頭に立つこともできず、ためらい、葛藤し、悩みながらも誘惑に負けたりもしたでしょう。このようなことを考えてみると、信仰を持たない人たちと違いはなさそうです。けれども、そうではありません。重要な違いがあります。聖徒たちはたとえ、ためらい、誘惑に負け、失敗しながら生きていたとしても、絶望はしませんでした。聖徒たちは、現実につづかって転んだりしても、また立ち上がることを繰り返して生きて行きました。聖徒たちは、決して完璧ではありませんでした。けれども神様のみ言葉を自分の人生の中心として生きて行こうと努力しました。そして聖徒たちは、自分の人生を完走しました。このような姿があったからこそ、彼らは今日と一緒に読んだヨハネの黙示録に出てくる「神の刻印」を額にもらう人になったと、私は思います。そして、「命の書」に名前が記されたのでしょう。

今、彼らが走って行った道の上に私たちが立っています。私は、今日、私たちが諸聖徒日を記念することは、信仰の先輩たちが走っていった道の上に立つ私たちが、今その信仰のバトンを受け継ぐことであると思います。したがって、今日は私たちがこの信仰の道を完走するために新たな誓いをする日でもあります。現実を振り返ってみると恥ずかしくて自信がないけれども、頑張って最後まで完走しようと決心をしましょう。

今日と一緒に読んだ聖書日課には、ひたすら私たちを応援し、勇気を与えてくれるみ言葉が記されています。シラ書は、信仰の先祖たちに対する賛歌ですが、また一方では神様が自分の人生を完走した人々を祝福してくださるみ言葉でもあります。シラ書にはこのように記されています。

「彼らの子孫はとこしえに続き、その栄光は消え去ることがない。」(シラ 44:13)

今日ご一緒に読んだヨハネの黙示録にも、このように慰めと励しのみ言葉が記されています。

「彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」(黙示 7:16-17)

けれども何よりも大きな力になるのはイエス様のみ言葉にほかなりません。今日の福音を通してイエス様はこのように勇気を与えてくださいました。

「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」(マタイ 5:12)

ですから今日、諸聖徒日を迎え、私たちも神様のみ言葉に従いながら忠実に生きていくことを新たに誓いましょう。神様は私たちを応援し、勇気と知恵を与え、祝福と恵みを持って報いでくださるでしょう。天には私たちのための大きな報いがあります。

この一週、神様の選ばれた民としての誇りを持って、頑張って、神様が用意してくださった恵みを豊かに受けられますように心からお祈りいたします。